

中国の三農問題と 飼料需給問題

国際領域上席主任研究官 河原昌一郎

講演者／浙江大学中国農村発展研究院院長 黄祖輝氏

浙江大学経済学院教授 顧国達氏

日時／平成24年8月27日（月）午後2時～5時

於／農林水産政策研究所セミナー室

中国では、農業、農村、農民に関する問題を一括して三農問題と呼んでいます。中国の社会は、都市と農村の二元構造となっており、農民は都市住民と比較して社会保障、雇用条件等で不利な扱いを受けています。このため、経済の著しい発展にかかわらず、都市と農村の格差の拡大、農民労働者の低賃金労働、若年労働力の流出による農村高齢化等、三農問題の複雑化ないし矛盾の激化という現象が見られるようになってきました。

また、中国では、食生活の高度化に伴って畜産物消費が急速に拡大していることから、飼料需要が増加し、最近では中国国内のトウモロコシ需給が逼迫するという事態も見られるようになってきました。中国の飼料需給動向は、トウモロコシを含む穀物貿易の動向等にも影響を与えることとなることから、我が国においても関心の高い問題です。

こうした情勢に対応して、本セミナーでは、中国の三農問題については浙江大学中国農村発展研究院院長の黄祖輝氏から、飼料需給問題については同じく浙江大学経済学院教授（中国農村発展研究院兼務）の顧国達氏からお話をいただきました。浙江大学は中国でも屈指の総合大学で、その中国農村発展研究院は中国の農業、農村問題等に関する研究の拠点とされています。

以下で、お二人のお話のポイントをご紹介します。

1. 中国の三農問題について（黄祖輝氏）

（1）中国三農問題をどう評価するか

中国の三農問題は、基本的には、現在の都市・農村の二元社会構造が一元社会構造へと転換する前の過程で生じている摩擦や矛盾であると見ることができます。中国は、これまで、この二元社会構造の下で、粗放的な経済運営を行い、高度経済成長を成し遂げてきましたが、これには大きな代償が伴っており、こうした経済成長の方式を今後とも維持することは難しくなっています。

中国の二元社会構造による経済成長は、現在、二

つの大きな制約に直面しています。

一つは、資源・環境の制約です。エネルギーを含む中国の資源状況は、二元社会構造の下での粗放式の経済をこれ以上継続させることを困難にしています。また、生態環境も著しく悪化しています。

もう一つは、人的資源の制約です。中国は人口が多く、労働力は豊富ですが、二元社会構造のため、多数の労働力の文化水準が低く、近代産業への適応がうまくできていません。これを変えようとしても、構造的な問題のため、短期で解消することはできないのです。

このように、中国の三農問題の実質は、経済社会構造の転換に関する問題なのであり、換言すれば農業、農村、農民の発展に関する問題なのです。そして、その中心的な問題は農民の問題です。農民が主体性と近代性を向上させ、近代農業と近代農村を担う主体となって発展しなければ、二元社会構造の矛盾が解決されることはないでしょう。

（2）中国の三農問題をどう解決するか

中国の三農問題の解決は、先ほど申し上げたように、農民を中心として行わなければなりません。それには三つの段階があります。

まず、最初の段階は中国農民の主体性を高めることです。そのためには農民に永久耕作権を保証して土地に対する権利を強め、農民が真の土地財産制度の主体となることです。また、農民の組織に自主的な権限を与えることも必要です。

次の段階は中国農民の近代性を促進することです。農民の知識水準を高め、労働力としての素質の向上を図り、同時に、近代農業の担い手としなければなりません。農村近代化のためには、農民の社会参加能力の向上も求められます。

第三段階は、市場体制、社会体制および政府体制改革を深化させることです。市場体制改革の重点は土地、労働、資金の三大要素市場の問題を農民の基本権益を保障する方向で解決することです。社会体制改革の重点は、都市農村の協調による平等な社会体系を構築することです。そして、政府体制改革の

重点は、全能型政府から公共型、サービス型の政府に転換させることです。

そして、これらの改革は、全国一律ではなく、地域の創意と工夫が取り入れられることによって、よりの確に進めることが可能となるでしょう。

2. 中国の飼料需給問題について (顧国達氏)

(1) 中国の畜産・養殖業の発展

中国の畜産・養殖業は、改革開放政策開始後、経済発展や政府の支援政策の下に、急速に発展してきました。1980年から2010年までの間の中国の動物性食品生産量は第1表のとおりです。

人口や食糧生産量の伸びと比較して、動物性食品生産量の伸びは著しく高くなっています。中国は、現在、すでに世界最大の畜産・養殖業国家となっており、一部の動物性食品の1人当たり消費量は、先進国の水準と遜色ないものとなっています。

(2) 飼料穀物の需要動向

畜産・養殖業の発展には、言うまでもなく、飼料生産量の拡大が必要です。このため、飼料として重要なトウモロコシは、生産量を大きく増加させてきて

おり、2011年の生産量は1億9278万トン、中国の穀物生産量の3分の1を占めるようになりました。しかしながら、第2表に示すとおり、畜産物等の消費は今後さらに拡大することが予想され、これとともに飼料用穀物の需要量も大きく増加することが見込まれています。中国では、すでに、飼料供給の不足を補うため、大豆、豆粕、魚粉等の輸入を増加させてきていますが、飼料用穀物の国内生産量を今後さらに増加させることも必要です。

(3) 飼料穀物の安定供給対策

中国の食糧安全保障は、従来、食用穀物を中心に考えられてきましたが、現在では飼料用穀物と工業用穀物の安定供給が重要な課題とされるようになりました。飼料用穀物生産の維持・拡大のため、中国では、①1.2億ヘクタールの耕地を確保すること、②農業の基盤整備を促進すること、③トウモロコシ等の飼料穀物の生産規模を拡大させること、④新しい飼料資源の開発を図ること、⑤自給を基本とした農業政策を整備すること、⑥国際協力を強化することといった施策を講じることであります。穀物については、国内での自給を基本としつつ、不足分は適正に輸入で補うというのが基本的な考え方です。

第1表 1980-2010年中国農産物生産量・年平均増加率 (単位：万トン、%)

| | 人口 (万人) | 食糧 総生産量 | 動物性食品生産量 | | | | |
|--------|------------|------------|----------|---------|---------|---------|---------|
| | | | 合計 | 肉類 | 家禽・卵 | 乳類 | 水産物 |
| 1980年 | 98,705.0 | 32,055.5 | 1,733.3 | 1,205.4 | 256.6 | 136.7 | 134.6 |
| 2010年 | 134,091.0 | 54,647.7 | 18,265.8 | 7,925.8 | 2,762.7 | 3,748.0 | 3,828.8 |
| 年平均増加率 | 1.0 | 1.8 | 8.2 | 5.8 | 8.2 | 11.7 | 11.8 |

資料：顧国達氏作成資料による。

第2表 畜産・養殖業飼料用穀物需要予測 (単位：万トン)

| | 2009年 | | 2020年(予測) | |
|-----|--------|----------|-----------|----------|
| | 生産量 | 飼料用穀物需要量 | 消費需要量 | 飼料用穀物需要量 |
| 肉類 | 7,650 | 11,838 | 9,198 | 14,110 |
| 卵類 | 2,743 | 4,524 | 2,920 | 4,810 |
| 乳類 | 3,733 | 1,307 | 6,210 | 2,200 |
| 水産物 | 3,622 | 1,811 | 6,570 | 3,285 |
| 合計 | 17,748 | 19,480 | 24,898 | 24,405 |

資料：顧国達氏作成資料による。